

令和元年6月18日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K20981

研究課題名(和文)「現場型グローバル人材育成」による大学のESDモデル構築 レジリエンスに着目して

研究課題名(英文) Developing Models of University Education for Sustainability and Resilience  
Connecting "Global" and "Local" Perspectives

研究代表者

二ノ宮リム さち (Ninomiya-Lim, Sachi)

東海大学・現代教養センター・准教授

研究者番号：90646499

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：レジリエンス向上につながるESDをグローバル、ローカル双方の視点を踏まえた大学の現場体験型教育として実現するため、いくつかの実践モデルの構築、実践、検証に取り組んだ。持続可能でレジリエントな社会づくりの現場に学生が参画することを通じた教育実践を検討し、大学と地域が緊密に連携しつつ、社会的、経済的、政治的不公正や生態的破壊を含む現実に向き合い、地域、学生、教員を含む学習者が自らの未来を切り拓くためのエンパワーメントを意識的に進めることが鍵となることなどを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、第一に、持続可能性とレジリエンスを社会の方向性として示し、グローバル人材育成を初めとする大学教育、さらには教育全体が、その方向性に向けて変容する必要性を共有した点にある。第二に、今後の大学教育のあり方として、現場体験型教育の概念を示し、グローバル・ローカル双方の視点をつなぐ大学と地域の協働における課題と可能性を明らかにした点にある。これらの点が、今後、持続可能でレジリエントな社会を支える大学のESDの進展、主流化に寄与すると期待される。

研究成果の概要(英文)：This research project included development, implementation, and analysis of models of education for sustainability and resilience for universities with both global and local perspectives based on genba (actual sites of issues and practices) experience. Study of cases of education based on students' participation in genba to build a sustainable and resilient society revealed some keys, such as the close university-community interaction to critically address the "realities" of multiple issues including social, economic, and political injustice and ecological destruction, and the empowerment of learners - students, faculty, and local people - to fully participate in creating their own futures.

研究分野：ESD、環境教育、社会教育、大学教育

キーワード：ESD 大学教育 高等教育 持続可能性 レジリエンス 現場体験 地域 グローバルとローカル

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 大学のグローバル人材育成と ESD

大学教育において「グローバル人材育成」の取組が急激に広がる中、世界の持続可能な発展を担うグローバル人材を育てる「ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育)」という視点から、可能性と課題を明らかにすることが求められる。1990年代以降、持続可能性へ向けた教育の役割が重視され ESD に関する議論や施策が展開し、2005年より「国連 ESD の 10 年」が実施される中、大学教育の ESD としての再構築が求められてきたものの、現実には限定的な取組に留まり、各大学による単なる一部の授業導入を越え教育全体を持続可能性に方向づけていく全学的取組と、大学間のみならず他セクターとの連携強化の必要性が指摘されてきた (Tilbury 2012、Granados-Sanchez ら 2012)。

### (2) 大学の ESD におけるレジリアンス概念の重要性

一方、近年、気候変動により増加・激化する気象災害や、東日本大震災のような大地震・津波といった自然災害に対し、人間社会が向き合い生き抜く力として「レジリアンス (Resilience)」（外部からのストレスを吸収し、変化を予知・認知して不可逆的悪影響を防ぎ、変化に適応し、柔軟に回復する力 (Haimes 2009)）が注目を集める。レジリアンス概念は、「システムの変化による不可逆的悪影響を防ぎつつ、柔軟に回復・発展する」という点からの持続可能性を提起する (上柿 2007)。環境教育や ESD を通じてレジリアンスを促す重要性と可能性に関して、国際的には 2008 年ごろから議論が広がってきた (Krasny・Lundholm・Plummer 2010)。国内では、東日本大震災後、自然と人間社会が相互に関係し変化する状況と、災害を生き抜く力の必要性が強く認識され、個人・社会・社会 - 生態システムのレジリアンスが注目される状況にあるが、ESD や環境教育におけるこれらレジリアンス育成に関する研究は、以下を含めごく少数の萌芽的研究があるのみである。

### (3) 大学の ESD 実現へ向けた「現場体験型教育」の意義

研究代表者は本研究以前に、「大学の環境人材育成における現場体験に関する実践研究 レジリアンス育成とアンラーン (2013~2014 年度挑戦的萌芽研究)」を通じ、大学における ESD の実現へ向けた現場体験の意義と課題を検討してきた (二ノ宮リム 2013、2014a、2014b)。こうした中で、大学のグローバル人材育成における「現場体験型教育」により、分野と国境を越えた学び合いを「現場」で展開し、「アンラーン」のプロセスを通じて科学知にもとづく専門教育と「ローカルな知」にもとづく現場体験を融合していくことが、ESD の実現につながることを論じ、さらにこれが個人と社会のレジリアンスにつながる可能性を示してきた。

#### < 引用文献 >

- Granados-Sanchez, J., Wals, A.E.J., Ferrer-Balas, D., Waas, T., Imaz, M., Nortier, S., Svansson M., Land, H.V., and Arriaga, G., 2012, Sustainability in Higher Education: Moving from Understanding to Action, Breaking Barriers for Transformation, Global University Network for Innovation (ed.), Higher Education in the World 4 – Higher Education's Commitment to Sustainability: from Understanding to Action, Palgrave Macmillan, 193-207.
- Haimes, Y.Y. 2009. On the Definition of Resilience in Systems. Risk Analysis Vol. 29, No. 4. 498-501.
- Krasny, M, Lundholm C., Plummer R., 2010, Resilience in social-ecological systems: the roles of learning and education, Environmental Education Research, 16:5-6, 463-474.
- 二ノ宮リムさち, 2013, 「大学の環境人材育成における「現場のための教育」の可能性と課題 持続可能な社会づくりへ向けた大学院教育を実現する「現場体験」とは」『共生社会システム研究』7(1), 137-157.
- 二ノ宮リムさち, 2014a, 「東京農工大学大学院における現場立脚型環境リーダー育成」『社会教育学研究』50(1):56-58.
- 二ノ宮リムさち, 2014b, 「大学における ESD 推進の可能性と課題 - 『戦略的環境リーダー育成拠点形成事業』の検証から - 」『環境教育』24(2): 3-16.
- Tilbury, D., 2012, Higher Education for Sustainability: A Global Overview of Commitment and Progress, Global University Network for Innovation (ed.), Higher Education in the World 4 – Higher Education's Commitment to Sustainability: from Understanding to Action, Palgrave Macmillan.
- 上柿崇英, 2007, 「社会 - 生態システム」論と公共圏 - 「レジリアンス」形成における公共圏の諸機能」『環境思想・教育研究』環境思想・教育研究会 第 1 号 34-41.

## 2. 研究の目的

本研究は、大学の現場体験型教育を通じて持続可能でレジリアントなグローバル社会の実現へ向けた力を育む可能性と課題を明らかにするために、大学教育実践事例を批判的に検討しつつ、成果を実践に反映させるアクションリサーチを実施し、実践モデルを構築することを目的

とした。特に、多様な学習者が多様な地域の課題を持ちより、それぞれの地域間や地域とグローバル社会のつながりを見出し、それぞれの文脈を意識しながら解決策を探るプロセスに着目しつつ、学生の現場体験が学生や地域にどのような学びをもたらすか、中でも学生や地域のレジリアンスにどのような効果をもたらすか、多様な学生が異文化と交流する中で各地域と学習者に固有な「ローカルな知」がどのような役割を果たし、相互の学びあいがどのように起こり、グローバル・ローカルな協働、共生へ向けた力がどのように生まれ、修了後の暮らしと仕事に活かされていくかを検討することを目指した。最終的には、ローカルな知に根ざしつつ、グローバルな視点から多様性を尊重し、他地域とつながり、地域と人のレジリアンスを高める ESD としての教育のあり方をモデルとして示すことを目指した。

### 3. 研究の方法

- (1) 「グローバル人材育成」「レジリアンス育成」等に関する資料収集・文献レビューおよびこれまでの研究成果整理による研究枠組の構築・確立
  - (2) 国内の大学教育実践事例に関する情報収集と研究対象事例の確定
  - (3) 2で確定した対象事例に関する文書分析、参与観察、学生・教員（海外協力大学教員を含む）・修了生への聞き取り（半構造化インタビュー）、質問紙調査
  - (4) (2)～(3)で得られた質的・量的データの検討、分析、考察
  - (5) 研究経過および成果の発表と発展
- 上記(1)～(5)は随時反復。

### 4. 研究成果

本研究期間を通じ、レジリアンス向上につながる ESD をグローバル、ローカル双方の視点を踏まえた大学の現場体験型教育として実現するため、いくつかの実践モデルの構築、実践、検証を行った。

第一に、地域のレジリアンスを高める大学教育として、東京農工大学による福島第一原発事故による放射能汚染の被災地での実習、宮城教育大学環境教育センターによる東日本大震災による津波被災地での防災教育、四日市大学による地域の公害の経験を教育資源として活かす取組といった事例の検討から、主体的且つ批判的（クリティカル）なコミュニティ・エンゲージメントの必要性を明らかにした。レジリアンスの向上につながる大学の ESD を実現するためには、大学と地域が緊密に連携しつつ、社会的、経済的、政治的不公正や生態的破壊を含む時に「不都合な現実」をタブーとせず、地域、学生、教員を含む学習者が自らの未来を切り開くためのエンパワーメントを意識的に進めることが鍵となることを示した。（Ninomiya-Lim et. al. 2017）

第二に、学生の災害ボランティア活動を通じた「災害教育」を実践し、検討した。被災地を訪れる者の成長に着目し、災害ボランティアが現場体験学習として機能することで「生きる力」が育まれる可能性を確認し、「ボランティアツーリズム」を通じた災害教育を大学が促進していくことの可能性を論じた。（二ノ宮・田島 2017）

第三に、中学生の非認知スキル・認知スキル育成を主眼とした ESD を大学生が担う「ESD 塾」を実践、検討した。効果的な ESD においては非認知スキルと認知スキル双方の育成が重要となるという議論を枠組として、東海大学と秦野市立大根中学校との協力のもと、同中学生徒を対象とする「東海大学 ESD 塾」を 2018 年 1 月に開始した。週に一度、大学キャンパス内の教室に中学生が集まり、大学生ボランティアによる教科学習支援や体験型防災教育を実施した。この実践を検討する中で、教科学習支援と体験型教育を担当する学生の連携と協力の促進、認知スキルと非認知スキルの育成に関する複雑な枠組みの検討と分析、本実践を通じた大学生の学びへの着目と評価、ESD としての本実践の位置づけと評価といった課題と可能性の視点が示された。

第四に、大学授業の一環として、「持続可能な地域づくりへの参画」をテーマに実際の地域社会が直面する課題を学生が住民から学び、課題解決へ向けたプロジェクトを提案、実施する教育実践に取り組んだ。持続可能な開発目標（SDGs）に見られるグローバルな持続可能性への進展を意識しながら、地域の持続性とレジリアンスの向上に向け、社会参加やシティズンシップの力を学生と地域の双方に育む ESD として、現在、実践と検討が続いている。

また、一連の研究の流れのなかで、これからの地域づくりにおける「持続可能性」の意味をとらえることにも取り組んだ。環境と人権という二つの世界的課題を背景に発展してきた ESD を実体化していくために、社会教育領域で発展してきた実践知の共同的創造、教育理解の拡張、対話的・省察的教育を通じた主体形成といった提起を踏まえた大学教育の変革が求められることを示した。さらに、「個人をベースとする公共意識」「地球市民としての共同体意識」の双方から、「普遍的価値原理」としての持続可能性にもとづく地域コミュニティを形作っていくために、多様なアクター間の対話に加わる力を育てることが大学教育に求められることを指摘した。（二ノ宮リム 2018）

くわえて、大学を含む高等教育の変革に向けて、環境教育が果たす役割についても検討を行った。主体的・能動的市民を育成する対話を通じた教育が、持続可能でレジリアントな社会づくりにつながる大学教育を実現するために今後不可欠となることを示した。（二ノ宮リム 2017）

人間・社会・生態系の持続可能性を、特にレジリアンスの視点から評価する枠組みについて

の検討にも取り組んだ。まず、人間のレジリアンスについて、「楽観性・統御力・社交性・行動力・問題解決志向・自己理解・他者心理理解・家族資源・友人資源・先輩資源」の10項目に、「社会の現状を批判的にとらえ構造的課題に切り込む力・そのための支援」を加えた評価項目を整理した。また、社会と生態系を社会生態系システムというつながりとしてとらえ、そのレジリアンスに関する評価項目を、「頑強性・冗長性・臨機応変性・迅速性」に、「生態系のレジリアンスを低下させない管理対応・自然や生態系の変化に対する社会のレジリアンス向上」という社会と生態系の相互作用に着目した観点を加え整理した。

引用文献については、以下、「主な発表論文等」を参照。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

二ノ宮リムさち・古里貴士・高梨宏子・降旗信一・松本和信、2019、「大学生による学習支援を通じた中学生の非認知スキル育成・ESDの可能性 秦野市立大根中学校生徒を対象とした東海大学ESD塾の実践」、『東海大学現代教養センター紀要』, 第3号, 81-90.

<https://opac.time.u-tokai.ac.jp/webopac/TC10002553>

二ノ宮リムさち, 2018, 「社会教育が提起するESDの実体とは 普遍的価値原理としての持続可能性と対話の学び」, 『月刊社会教育』, No.744, 54-60. (招待論文)

Sachi Ninomiya-Lim, Furihata, S., Ofei-Manu, P., and Kaminaga, Y., 2017, "Reorienting Japanese university education towards community resilience in the wake of disaster responsiveness," Corcoran, P. B. Weakland, J. P., and Wals, A. E. J. (eds), *Envisioning futures for environmental and sustainability education*, 311-320, Wageningen Academic Publishers. (査読あり)

DOI: [https://doi.org/10.3920/978-90-8686-846-9\\_23](https://doi.org/10.3920/978-90-8686-846-9_23)

二ノ宮リムさち, 2017, 「『主体的・対話的で深い学び』を実現する環境教育 高等教育の視点から」, 『環境教育』, 26(3), 53-58 (査読あり).

DOI: [https://doi.org/10.5647/jsoee.26.3\\_53](https://doi.org/10.5647/jsoee.26.3_53)

二ノ宮リムさち・田島祥, 2017, 「『災害教育』としての災害ボランティア派遣 東海大学チャレンジセンター熊本復興支援プロジェクトにおける学生の成長」, 『東海大学現代教養センター紀要』, 第1号, 171-183.

〔学会発表〕(計13件)

Mayuko Horimoto, Sachi Ninomiya-Lim, 2018, 'Public Achievement-style Education at Tokai University - Background and Practice', 日本教育学会 第77回年次大会 Research Session II Education and Politics in a Global Age. (招待発表)(小玉重夫・菊池かおり・ハリー・ボイト・高橋史子・堀本麻由子・二ノ宮リムさち, 2019, *Education and Politics in Global Age*, 教育学研究, 86(1), 62-66.)

二ノ宮リムさち, 2018, 「社会生態システムと学習者の持続可能性とレジリアンスを育てる大学のESD」, 『日本環境教育学会第29回年次大会発表要旨集録』.(口頭発表)

二ノ宮リムさち, 2017, 「『持続可能性』を軸とする『主体的・対話的で深い学び』とは ESD・環境教育の視点から」, 『大学教育学会第39回大会発表要旨集録』, 106-107.(口頭発表)

Sachi Ninomiya-Lim, 2017, 'Comparative Study of EE/ESD in Higher Education in Asia: A Proposal', 『日本環境教育学会第28回大会研究発表要旨集録』.(口頭発表)

二ノ宮リムさち, 2017, 「持続可能でレジリアンな地域を支える大学教育とは」, 『日本社会教育学会 第64回研究大会発表要旨集録』.(口頭発表)

二ノ宮リムさち, 2017, 「大学のESDとSDGs 教育と現場をつなぐ」, 『日本環境教育学会第28回大会研究発表要旨集録』.(口頭発表)

Sachi Ninomiya-Lim, Shinichi Furihata, Yi-Hsuan Tim Hsu, Chankook Kim, Sun-Kyung Lee, Ko Nomura, Ryo Sakurai, Kimiharu To, 2017, 'Diversifying Environmental Education Practice and Research-Exploring Alternatives Within the Cultural and Social Contexts of Asia', 7th World Environmental Education Congress. (ラウンドテーブル)

二ノ宮リムさち, 2016, 「ESDとしてのパブリックアチーブメント型教育 大学教育に対する「社会的要請」とはなにかを考える」, 『日本環境教育学会 第27回大会研究発表要旨集録』.(口頭発表)

二ノ宮リムさち, 2016, 「社会生態システムと学習者のレジリアンスに対する評価基準構築: 大学におけるESDの視点から」, 『日本社会教育学会 第63回研究大会発表要旨集録』.(口頭発表)

二ノ宮リムさち, 2015, 大学のグローバル教育と「現場体験」~レジリアンス育成の視点から, 異文化間教育学会第36回大会.

Sachi Ninomiya-Lim, 2015, *University Education for Resilience and Sustainability - Genba Experiences within Contexts to Connect Learning with Living.*

二ノ宮リムさち、2015、Experience-based *Glocal* Education as ESD for University Students、日本環境教育学会第26回大会。

二ノ宮リムさち、2015、大学教育に求められる実践性・学際性・国際（グローバル）性とはなにか 「社会的要請」とESDの関係を考える、日本社会教育学会第62回研究大会。

〔図書〕(計3件)

鈴木敏正・梅津徹郎・安藤聡彦・古里貴士・朝岡幸彦・小玉敏也・宋美蘭・吉岡亜希子・岩本泰・仙田考・井上大樹・降旗信一・長谷川万希子・甚野雄治・水山光春・二ノ宮リムさち・佐野淳也、2017、*教育の課程と方法*、学文社、228 (196-210)。

降旗信一、高田研、神長唯、佐々木豊志、高雄綾子、萩原豪、遠藤晃、野村卓、中澤朋代、齋藤雅洋、二ノ宮リムさち、2017、*持続可能な地域と学校のための学習社会文化論*、学文社、160 (125-139)。

笹川孝一、朝岡幸彦、小栗有子、酒井佑輔、牧野篤、内田光俊、秦範子、中川恵里子、金宝藍、佐々木美貴、大高研道、二ノ宮リムさち、鈴木尚子、笹井宏益、佐藤一子、田中治彦、高雄綾子、湯本浩之、鈴木敏正、末本誠、荻野亮吾、*社会教育としてのESD：持続可能な地域をつくる（日本の社会教育第59集）*、東洋館出版社、265 (136-146)。

〔その他〕

ホームページ

持続可能でレジリエントな世界と教育・学習について考える 二ノ宮リムさち Website

<https://sachinl.wixsite.com/sachi-ninomiya-lim/esd>

6. 研究組織

該当なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。